

## IV 別居子との接触頻度 (Q4)

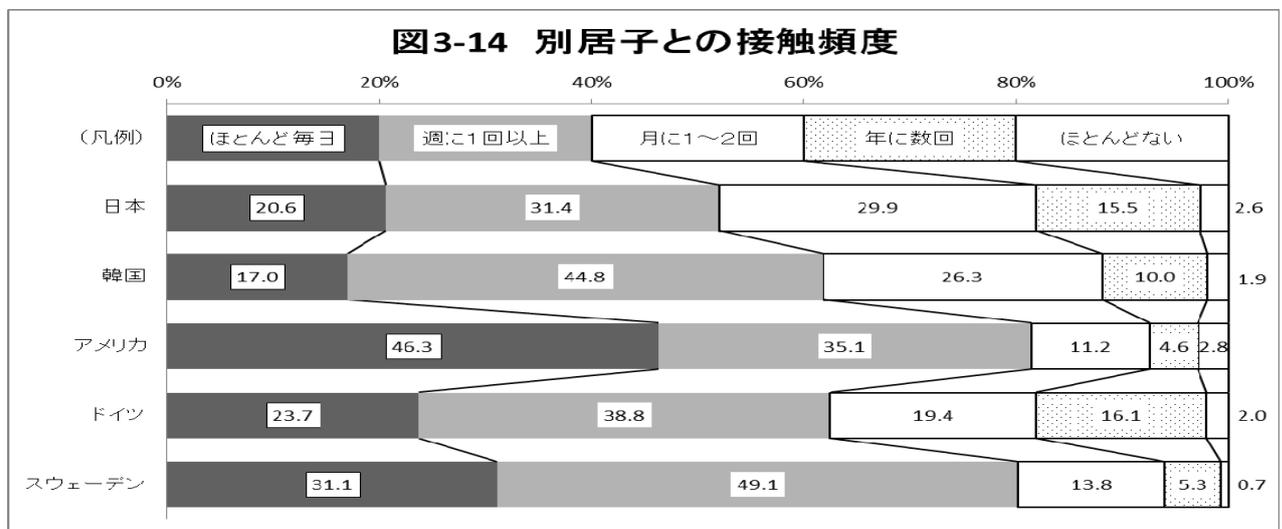
### 1 調査結果の概要

別居している子どもとどのぐらいの頻度で会ったり、電話等で連絡をとっているかをたずねた。別居子が2人以上いる場合は、接触が多いほうの子どもを想定して答えてもらった。図3-14は、この設問に対する回答の国別の単純集計結果である。

日本の高齢者が別居子と接触する頻度は、「週に1回以上」(31.4%)を最頻値として、以下、「月に1~2回」29.9%、「ほとんど毎日」20.6%、「年に数回」15.5%などが続き、他の4カ国に比べて別居子と会う頻度が低い傾向が確認できる。

「ほとんど毎日」と「週に1回以上」という回答の合計比率を求めると、多い順に、アメリカ81.4%、スウェーデン80.2%、ドイツ62.5%、韓国61.8%、日本52.0%となる。一方、別居子と会う頻度が「年に数回」「ほとんどない」という人の合計比率を求めると、日本18.1%、ドイツ18.1%、韓国11.9%、アメリカ7.4%、スウェーデン6.0%という状況であり、やはり日本における別居子との接触頻度の低さが際立っている。5カ国の中では、アメリカにおいて「ほとんど毎日」が46.3%に上るなど、別居子との接触がきわめて盛んに行われている様子がみとれる。

前章でみたように、日本及び韓国に比べ、欧米3カ国では子どもとの同居率が低い。したがって、これら欧米諸国では、別居を前提として老親と成人子が意識的にコミュニケーションを図ろうとしている様子がうかがえる。他方、日本と韓国は、子どもとの同居率が相対的に高いという点で共通しているにもかかわらず、日本ではとりわけ別居子との交流が不活発であるといえる。



## 2 時系列比較

この設問は、過去5回の調査でも調査項目として用いられてきた。ただし、第5回調査以降、質問文に若干の変更が加えられた点には留意したい。第2～4回では、「どのぐらいの頻度で会われますか」という表現で、対面的な接触の頻度に限定してたずねていた。また、接触の対象は「別居しているお子さん方」という表現により、別居子が複数いる場合は、それぞれとの接触頻度を総合して答えてもらっていた（ただし、第2回は「別居しているお子さん」という表現であるため、どちらにも解釈できる）。しかし第5回以降は、各種情報通信機器の発達を考慮に入れて、対面接触のみならず電話等による間接接触も含めるとともに、複数の別居子がいる場合は、そのうち最も頻繁に接触のある子ども一人に限定して回答してもらった。前者の変更は、接触頻度を高める方向に作用し、後者の変更は数値を低下させる方向に作用するだろう。

以上のような理由により、この設問に関して厳密な意味での時系列比較は行えない。しかし、参考までに、第2回から第7回までの時系列データを表3-2に示した。

表3-2 別居子との接触頻度（時系列）

（別居している子供が1人以上いる方に）（%）

	日 本							ア メ リ カ						
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
1 ほとんど毎日		14.4	14.3	13.5	16.3	16.7	20.6		15.3	21.2	19.4	36.3	41.1	46.3
2 週に1回以上		19.1	17.2	16.7	30.9	30.1	31.4		35.7	40.8	36.0	45.4	39.4	35.1
3 月に1～2回		33.2	30.0	27.2	33.7	34.9	29.9		18.6	17.9	18.1	11.4	12.5	11.2
4 年に数回		30.0	34.7	37.9	16.9	15.7	15.5		20.6	13.0	19.6	4.1	5.0	4.6
5 ほとんどない		3.3	3.6	4.6	2.0	2.6	2.6		9.6	6.7	6.2	2.4	1.7	2.8
6 別居している子供はいない					-	-	-					-	-	-
無回答		-	0.1	0.1	0.2	-	-		0.2	0.4	0.6	0.5	0.2	-

	韓 国						ド イ ツ					スウェーデン	
	第1回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第5回	第7回
1 ほとんど毎日		9.1	6.2	12.1	23.2	17.0	31.2	27.6	35.5	24.3	23.7	38.7	31.1
2 週に1回以上		13.8	20.5	33.4	43.7	44.8	29.4	30.9	40.3	34.0	38.8	44.8	49.1
3 月に1～2回		28.5	33.9	30.8	25.4	26.3	20.2	23.9	11.3	18.1	19.4	11.6	13.8
4 年に数回		46.3	38.0	22.4	6.2	10.0	16.6	13.8	8.9	19.5	16.1	3.5	5.3
5 ほとんどない		2.3	1.4	1.4	1.6	1.9	2.1	3.0	4.0	3.7	2.0	0.9	0.7
6 別居している子供はいない				-	-	-			-	-	-	-	-
無回答		-	-	-	-	-	0.5	0.7	-	0.3	-	0.5	-

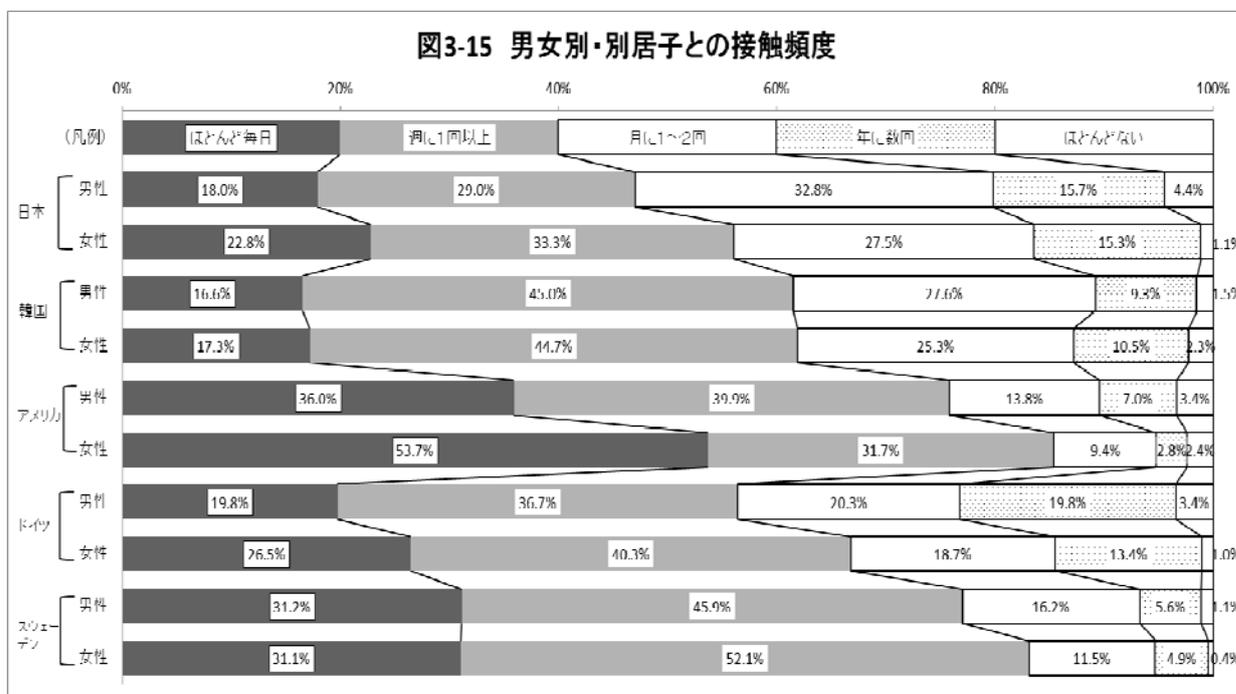
注）5の項目は、第2～4回は「ほとんど会わない」。

この質問は第4回までは「別居している子供が1人以上の方」のみを対象としており、6の選択肢はなかった。時系列比較のため第5回以降は集計で「別居している子供が1人以上の方（F5で別居している子供が1人以上の方）」に限定して数値を算出。

表3-2から読みとれるいくつかの特徴を指摘する。日本、韓国、アメリカでは、近年ほど「ほとんど毎日」あるいは「週に1回以上」接触があるという回答の比率が高くなっており、「年に数回」会う、あるいは接触が「ほとんどない」という回答はおおむね減少している。ドイツに関しては必ずしもそのような動向は確認できないが、全般的には、電話等を介した間接触も含めてたずねた影響が現われているのではないかと推測される。

### 3. 男女別比較

図3-15は、この設問に対する各国対象者の回答を、男女別に示したものである。韓国については回答の男女差がほとんどみられないのに対し、日本をはじめとする他の4カ国では、男性より女性のほうが別居子との交流頻度が若干高い傾向にある。「ほとんど毎日」あるいは「週に1回以上」接触があるという人の合計比率は、日本では、男性47.0%、女性56.1%となっている。他の3カ国についても、男性、女性の順に比率を挙げると、アメリカ75.9%、85.4%、ドイツ56.5%、66.8%、スウェーデン77.1%、83.2%という結果である。一般に、近年の親族づきあいは父系中心・男性中心から双系的なものへ、あるいは母系中心・女性中心的なものへと変化しているといわれる。これらのデータも、そうした親族づきあいの現代的特質を推測させるものである。



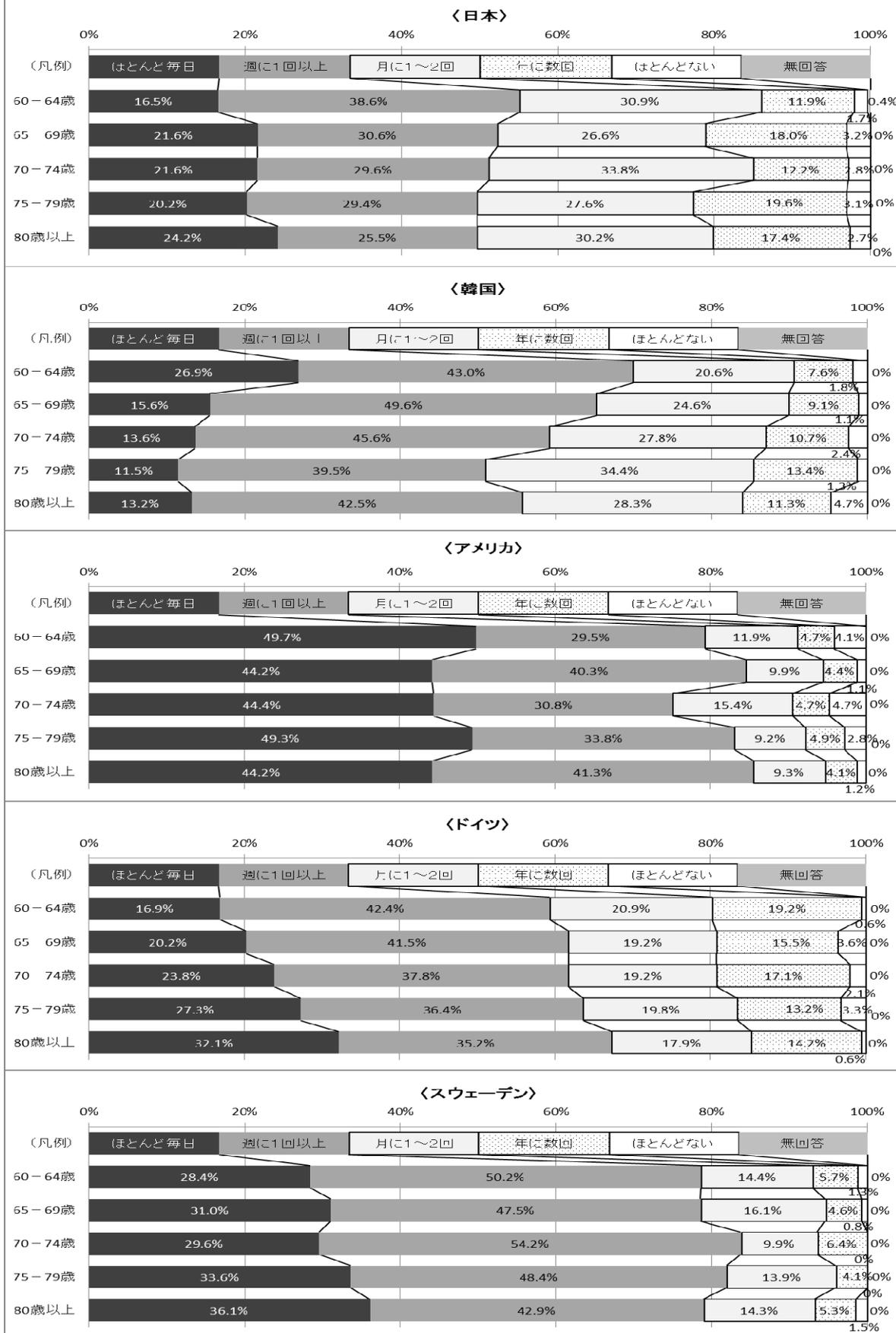
#### 4. 年齢階層別比較

この設問に対する回答には、前述したように男女差がみられるとはいえ、それほど大きなものとはいえない。そこで、図3-16には、男女を込みにして、年齢階層別にクロス集計をおこなった結果を示した。

5カ国ともその傾向性を一義的に描写することは難しいが、加齢とともに、ドイツでは接触頻度が増加していくのに対し、韓国ではむしろ低下していく傾向を示すことが確認できる。これらの国に比べれば、日本、アメリカ、スウェーデンの3カ国は、やや不規則な増減を示しながらも、全体として大きな変動はみられない。ただし、総数レベルで確認したように、アメリカやスウェーデンは全体水準が高いのに対し、日本は最も低い値を示している点には留意すべきだろう。

一般に、高齢になるほど子どもとの接触に心理的満足や実質的な援助を求める傾向にあることを考えれば、日本や韓国はそのような高齢者のニーズに対応していないといえる。ただし、前章で確認した通り、日本と韓国は欧米3か国に比べて子どもとの同居率が高いため、同居子との交流が日常的にあるだろうことを前提にすれば、総合的には子どもとの接触は多いといえるのかもしれない。

図3-16 年齢階層別・別居子との接触頻度

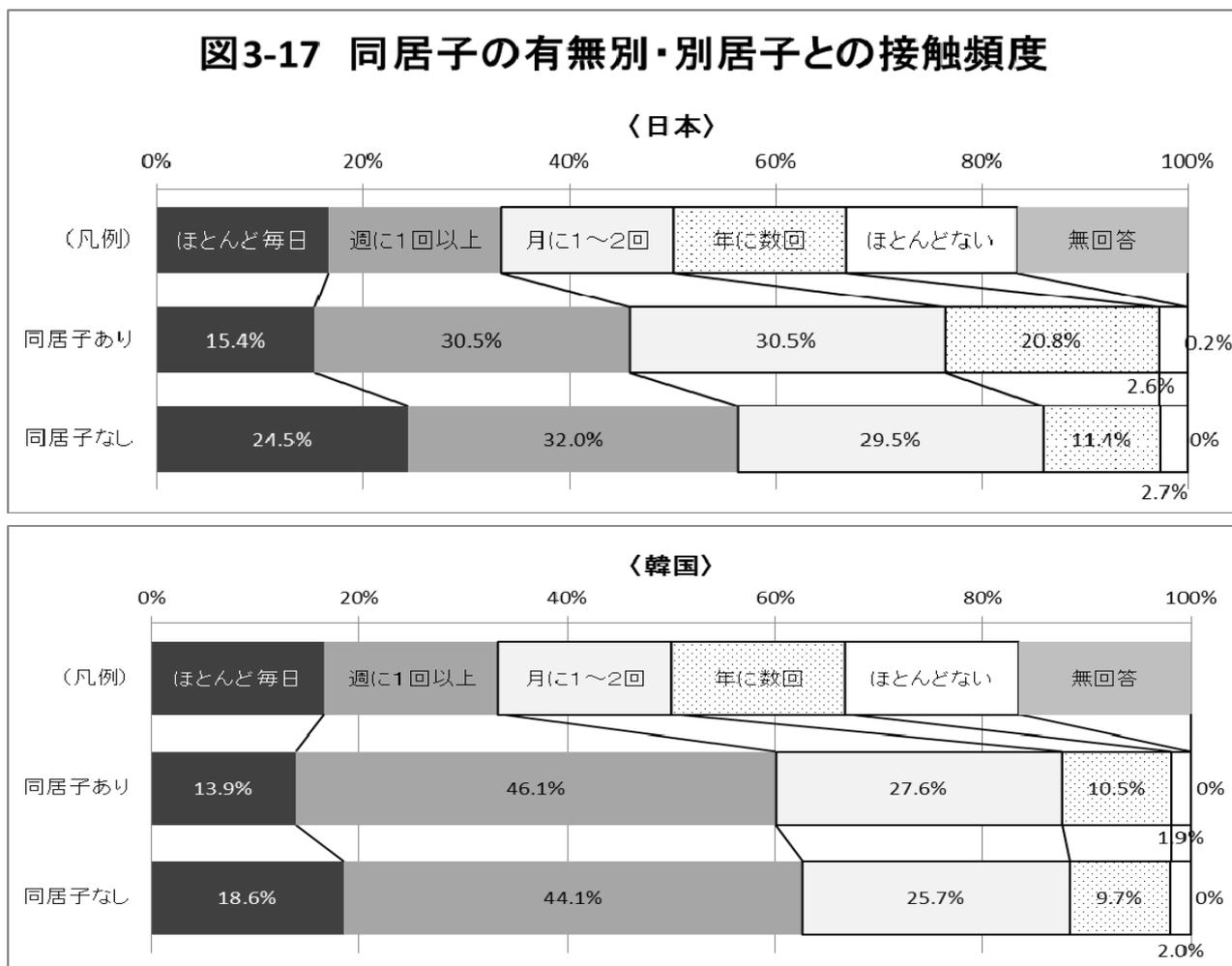


## 5. 世帯類型による差異

日本と韓国は、今日でもなお、儒教的倫理に基礎づけられた家規範の影響が残っており、高齢な親への情緒的・実質的支援への社会的期待は欧米3カ国に比べて高いものと推測される。別居子との直接・間接の接触は、親への支援状況を推測する一つの指標となりうる。ただし、前項でも触れたように、欧米諸国と比べて子どもとの同居率が高い日本と韓国では、高齢者の子どもとの接触に対するニーズは、同居子の存在により充足される面があるかもしれない。

そこで図3-17では、日本と韓国に限って、同居子の有無別に別居子との接触頻度につきクロス集計をおこなった結果を示した。日本についてみると、同居子がいない人はいる人より接触が密な傾向が確認できる。「ほとんど毎日」接触があるという人は、「同居子あり」15.4%、「同居子なし」24.5%と、後者が10ポイントほど高かった。また「週に1回以上」接触があるという人の割合も、「同居子あり」30.5%、「同居子なし」32.0%と若干高い値を示した。一方韓国の場合は、「ほとんど毎日」接触がある人は、「同居子あり」では13.9%、「同居子なし」では18.6%、「週に1回以上」接触があるという人は「同居子あり」では46.1%、「同居子なし」では44.1%と、この2つのカテゴリーの合計値を求めても3ポイント程度の違いにしか過ぎない。韓国では特に、同居子の有無が別居子との交流に影響を及ぼしてはいないようである。ただし、概要でも確認したように全般的な接触頻度の水準は日本より韓国のほうが高く、この傾向は同居子の有無にかかわらず妥当する点には留意したい。

図3-17 同居子の有無別・別居子との接触頻度



さらに、図3-18は、同じく日本と韓国に限って、世帯類型別に別居子との接触頻度のクロス集計をおこない、その結果を示したものである。日本については、「夫婦と未婚の子からなる世帯」および「三世帯世帯」の場合の接触頻度が低く、「単身世帯」と「夫婦世帯」では相対的に接触頻度が高くなっている。しかしその程度は、「ほとんど毎日」と「週に1回以上」を合計しても60%弱に過ぎず、他の世帯類型と比べて著しく差があるわけではない。韓国についても「夫婦と未婚の子からなる世帯」「三世帯世帯」の接触頻度が低い傾向は確認できるものの、もっとも社会的孤立が問題になりやすい「単身世帯」でも、「ほとんど毎日」「週に1回以上」を合計した比率は、「三世帯世帯」とほぼ変わらない55%程度の値に過ぎない。

以上のことから、日本と韓国では、高齢者が子どもと別居することを前提として、相互に交流する慣習や規範がなお十分には定着していないものと推測される。